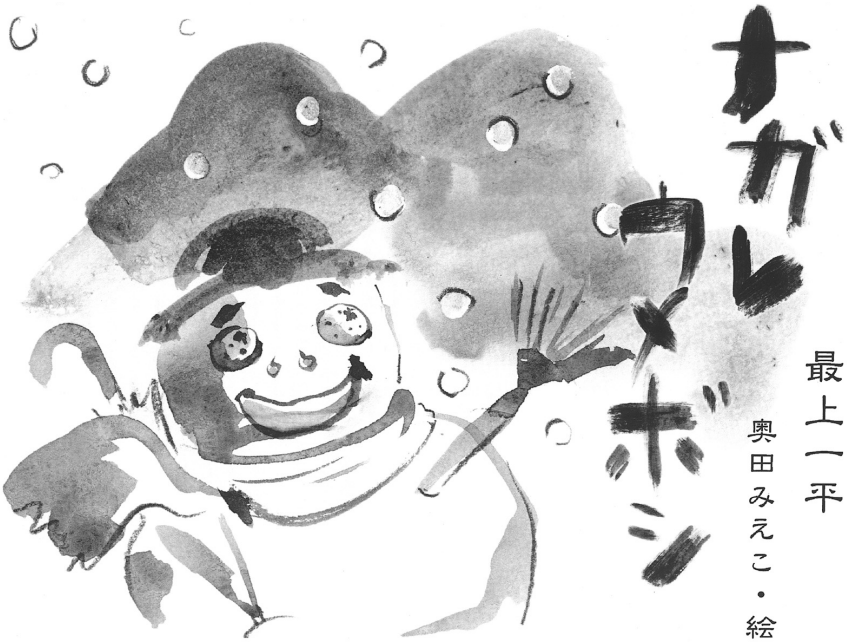

オガワウメボシ

最上一平
奥田みえこ・絵

暖日山（ぬくいやま）の中腹あたりを、三羽の白鳥が一本の線になって、川の上流の方へ飛んでいきました。銀河は両手を口にあててさけびました。

「オーイ、こっち来ーい」

一本の線は雪のつもった暖日山や、どんよりした空の色にとけこむように、小さくなってゆっくり動いていきます。親子だろうか。兄弟？　友だち？　と思っていると、ごまのようになって、上流にある山のかげに消えました。

銀河は庭先にできた雪の壁をキックして、なにをしようかと考えました。今年は大雪です。二メートルは積もりました。

桜堂地区には、小学生が三年生の銀河ひとりきりです。スクールバスで通っている小学校に行けば友だちはいますが、桜堂ではひとりぼっちなのでした。

なにをしようか、おもしろいことは思いつきません。それでしかたなく、雪だるまでも作ることにしました。小さな雪玉をつくって、ころころころがしていきました。だんだん大きくなって、雪玉に手ぶくろのあとがつきました。キッッ、キッッ、と新雪が鳴りました。

大きくなって動かなくなった時、銀河は、ひらめきました。

特別な雪だるまを作ろう。銀河は思いつきににんまりしました。それで、今作った雪玉にキックをくらわせ、こわしました。